平成２６年３月１日発行

かまにし

発　行　地域力推進蒲田西地区委員会
編　集　地域情報紙編集委員会
第５１号

わがまちの顔　島田利一画伯

西蒲田四丁目にお住まいの元日展審査員島田利一画伯は、防犯協会発行の「家庭と防犯」の表紙を昭和四十四年一月から平成二十四年十二月まで四十四年間毎月執筆されました。

また、ほぼ同時期の防犯カレンダーの絵も先生の作品です。

大正十年東京神田で生まれ、三歳で引越した先の北海道夕張郡でお寺の住職に絵を習いました。やがて、本格的に絵の勉強がしたくて十七歳で上京し、浅草の大きな看板屋に弟子入りしました。

夜学に通って絵の勉強をさせてもらいながら、昼は映画館等の看板の絵を描く仕事をしました。モデルを描く会があることを知り、そこに参加して昭和二十八年に日展に初入選しました。その後大久保作次郎先生に入門して絵の修業をしてたくさんの賞をもらい、昭和四十一年日展特選を受賞、昭和四十四年「家庭と防犯」の表紙を描き始めました。

昭和六十二年に、日展審査員になりました。九十二歳の今は日展会員として活動をしています。

先生の描かれた絵は日本の風景が多く、特に富士山の絵は濃い紅色に焼けたその一瞬の姿はすばらしく、さすが日本一の山です。

先生はまだまだお元気で今もお弟子さんと山梨県まで写生に出かける等、現役でご活躍中です。

第 45 回日展（2013）　白川郷

これからも健康に気をつけてすばらしい絵をたくさん描いて下さいますよう、地域の住民として心より願っております。

（取材　石渡、塩田、三瓶委員）

ご存知ですか？「つか」ぬことをお話ししますが…

「塚」とは土などをこんもりと盛り上げて周りよりも少し高くなったところを指す言葉で、「つく（築く）」と同源の言葉です。何かのしるしに作られたもので「貝塚」「一里塚」「富士塚」などと使われますが、単にお墓の意味を表すこともあります。人間の手で作られたものとは限らないようで「蟻塚」などの言葉もあります。

蒲田西地区には「女塚」「道塚」のように塚のついた旧町名がありました。そのいわれについては本紙の第二、三十三号などにすでに記載されています。

「女塚」については、一七九四（寛政六）年に古川古松軒によって書かれた『四神地名録』によれば三つのいわれが紹介されています。その一つはかつてこの地に住んでいた長者の娘を葬った塚ということであり、二つ目は旅の美しい女性がここで殺され、哀れに思った里人が葬って標に墳を築いたというもの、そして三つ目が矢口の新田神社に祀られている新田義興に愛された少将の局を葬った塚だということになっています。

それから約三十年後の一八二六（文政九）年に編纂された『新編武蔵風土記稿』には上記の一つ目と二つ目のいわれが簡単に紹介されています。また、一八三六（天保七）年の江戸名所図会には三つ目の少将の局を葬った塚だと紹介されています。

「道塚」については前掲の『四神地名録』では、この村に子取塚というのがあって、雨の夜うしみつ時になると赤子のなく声が聞こえる。昔は人買いがいて子供をさらって他所に連れていき売っていた。そのような曲者を打ち殺して埋めた塚ではないか、と書いています。一方の『新編武蔵風土記稿』ではいわれが全く違っていて、この村には小鳥塚と呼ばれる古い塚があって、古の鎌倉街道沿いにある。それが名前のいわれではないかと村人が言っていた、と紹介しています。かつては読み方（音）が同じならば違う漢字を使うことがよくあり、どちらも「ことりづか」ですが、大分印象が違いますね。筆者はこのギャップに興味を持って、もう十数年昔ですが「ことり塚」というタイトルの絵本を作ったことがあります。『新編武蔵風土記稿』には小鳥塚を独鈷塚とも呼んでいると記しています。

他にも女塚については女七塚、道塚については三つ塚などの由来説もあるようです。考えてみると女塚は御園村との村境にあり、道塚のいわれとなった塚は現存はしませんが、今から一四四年前に作られた村地図で確認すると古川村や町屋村との村境にあったことがわかります。かつては村境には悪霊が村内に入ってくるのを防ぐためによく道祖神が建てられましたが、そんな役割も担っていたのかもしれません。

（取材　多田委員）

編集後記

「道」には、通り、すじみち、道理など様々な意味がありますが、その中の一つは目的地に行くまでの道程を言います。二面に出てくる御練街道とは、まさに本門寺へ向かう道程を指します。

今回、特集でご紹介しました御練街道と、四面に出てくる古（いにしえ）の鎌倉街道の二つは同じ道です。また、古道とも呼ばれるこの道は歴史が古く、そのためか、様々な呼び方があるようです。

お会式桜のある大坊本行寺へ続く道を、本堂へ入る角で曲がらずに道なりに北へ進むと、池上梅園に辿り着きます。今はちょうど紅梅、白梅の花が咲き、春の訪れを感じることができるのではないでしょうか。池上梅園は新大田区百景に選ばれています。大田区ホームページ中の新大田区百景の紹介ページでは、一面の島田利一画伯が描いた池上梅園が掲載されています。

かまにし17をお読みいただき、ありがとうございます。情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などございましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

蒲田西特別出張所管内

人口	男	31，630人
	女	29，178人
	計	60，808人
世帯		33，566世帯

平成26年2月1日現在

お会式と本門寺道

本門寺道（別名・御練街道）

京浜急行・六郷土手駅を降りると目の前の道路が旧多摩堤通りである。正面に小さな和菓子屋「梅泉伊東」がある。店の脇に幅三メートルにも満たない小路があり、ここが御練街道の始点である。本来、六郷の渡し場に直結していた小路だったが、明治三十二年（一八九九）に開通した京浜急行の鉄道用地と堤防の移設で消滅した。

江戸時代後期より本門寺詣での人々が急増した。この街道は六郷の渡を使い、川崎側からの多くの参詣人に利用されてきた。

現在、街道を匂わす風情は全く無く、一歩小路に入ると、そこは戦後の高度成長期に多くの労働者が集まった場所であった。その一角を抜けると、目新しい中高層のマンションが立ち並び、風景が一変する。

街道は明治五年（一八七二）、日本初の鉄道路線の敷設と、耕地整理によって一部を寸断されているが、若干の迂回で元に戻ることが出来る。北上し、道塚の地名由来になった、小鳥塚があったという志茂田交番前に到達する。ここまでが六郷地区である。

御練街道は蒲田西地区の中央を真北に直進して行く。蒲田電車区を過ぎ、六郷用水が斜に交差した六差路の先に、環状八号線の信号がある。この先に旧目蒲線の踏切と本門寺道駅（後に道塚駅と改称）があったが、昭和二十一年、路線変更の際に廃止された。

さらに直進し、蓮沼駅手前で踏切を渡り、交番左を線路に沿って進む。さすがに門前町の中まで線路を引き込む訳には行かず、左に大きくカーブを切り池上駅を作った。街道は線路と別れ、五十メートル右に池上五丁目公園がある、ここから先が池上地区である。元東電営業所の先、バス通りの信号を横断し、北上すると池上駅からの新参詣道と合流する。

合流地点、くず餅屋の「池田屋」手前に、「本門寺参道」の石碑が建っている。また、ここを六郷用水が東西に横断し、地図からこの一角を切り取ると、道路が漢字の「天」に見える。一画目が池上道（旧道）、二画目が六郷用水（北堀）、三画目が池上駅からの参道、四画目が御練街道である。

六郷の渡し場から本門寺の総門まで約五キロメートル弱、大人の足で一時間半程度である。

御練街道とは、お会式に集まる万灯の行列が練り歩く様子からそう呼ばれたと言われている。

一方、東海道を南品川から、あるいは青物横丁から大井村を経て本門寺に達する池上道は多くの参詣客で賑わった。丸子の渡し、平間の渡しからの池上道も平間街道として、また羽田街道、旧多摩堤通り（筏道）も旧街道として認知されている。

あまり知られていないが、本門寺道・御練街道もれっきとした大田区の古道である。

お会式

―この項は文学教室作品集、天野光春著「お会式考」から文章の一部を引用させていただきました―

お会式というのは法会の式次第ということを略したもの。日蓮宗の寺では毎年十月十一日から十三日をお会式といい、僧侶や信徒が集まり日蓮の遺徳を偲ぶ法要が行われる。特にお逮夜にあたる十二日には信者が集まり団扇太鼓でお題目を唱えながら日蓮ゆかりの寺に参詣する慣わしがある。

東京では池上本門寺、堀之内・妙法寺、雑司が谷・鬼子母神のお会式が有名だが、特に日蓮入滅の地である池上本門寺には、夜になると百本近い万灯が集まり、参詣者は三十万人を超え、その賑いは大変なものだ。

このお会式、古くは御影講（みえいこう）または御命講（ごめいこう）と言われていて、すでに元禄（一六八八～九三）の頃には盛んだったようだ。

明治の初めに箱型万灯が作られた。太くて長い竹竿の上に箱型の行灯を取付け、その頂きから藤の細い蔓を数本垂らし、それに紙で作った花を付けたものだ。その行灯に灯が入ると、紙の花に灯が映えて薄化粧した満開の枝垂れ桜のように見える。そんな風情が多くの人の心をとらえ、東京近郊の講中は池上本門寺のお会式には必ず万灯を出すようになり、それがシンボルとなった。

加えて、火消し組みが多い品川方面の講中が、いなせな姿で纏を振り、露払いをするようになったのが、お会式人気をさらに盛り上げたという。

当時の省線（現ＪＲ）は開通以来お会式には毎年臨時列車を増発し、大森駅の混雑振りは想像を絶するものがあったようだ。明治十八年と大正九年には乗客の圧死事件が起きている。

大正時代になると池上本門寺のお会式には五十万人の参詣人で賑わい、その夜は省線が終日運転し参詣客のサービスに努めたという。そんなこともあって池上電気鉄道会社は、大正十一年のお会式に間に合わせるため、同年十月に取敢えず蒲田―池上間を開通させたが、複線になったのは昭和二年のことだった。

大坊 本行寺

取材日記

平成二十五年十二月二十五日、「六郷の渡し跡」の表示板が建つ北野天神に来た。今までにも何回か訪ねていたが、参拝する人も少なく、雑草も樹木も伸び放題、神秘的ゾーンに迷い込み、逆に自然のパワーがもらえそうな神社である。

今回は様子が違っていた。ひと目で中、高校生とわかるグループ、女子高生と母親か、他にも何組かが境内にいた。一瞬、「天神様とクリスマス、どんな関係か」と迷ったが、直ぐに気が付いた。天神様は学問の神様だ。合格祈願の参拝人たちだったのだ。たまたま遭遇した受験生たちの合格を祈念して神前に柏手を打ち、本日の目的である御練街道、体験取材のため、池上を目指し出発した。

体調を考え、ゆっくりと散歩モードに切り替えた。結果、蓮沼駅まで一時間以上もかかってしまった。本門寺名物、九十六段の階段登りを考え、一駅だが、蓮沼から池上線のお世話になることにした。

実は、本編には引用していないが、天野光春氏の「お会式考」の冒頭に、お会式桜の話が出てくる。お会式に合わせるように、花を咲かせる桜の話である。

今回は、本門寺は素通りし、大坊本行寺行きに予定変更する。花は無理でも、桜の樹だけでも確かめようと、総門手前から左の巻き道を選んだ。百メートルほどで稲荷神社と、その先のT字路にさしかかる。案内図通りに右折してはいけない。せっかく九十六段の階段を回避したのに、同じ高低差の坂道を登らされることになる。御練街道を歩き続けた身体にはきつすぎる。案内図を無視して直進、平坦な道を進むことにした。

脚力に自信のある方は、此経難持坂九十六段を登り、大堂を詣で、裏口から巻き道を横切り、急階段の途中にある朱塗りの宝塔を参詣しての本行寺行きを勧める。

本行寺の山門をくぐると、正面本堂の左に、一段高く玉垣で囲まれたお会式桜はあった。想像していたほどの古木ではなく、樹齢十年前後とみた。驚いたことに、お会式桜は今を盛の満開であった。

「天候の所為で今年は開花時期が遅れたのか」。寺務所に訊ねると、「この桜は開花の期間が長く、十月中旬から咲き始め、一月半ばまで咲いています」との話だった。

「日本の桜大辞典なんて、図書館にあるだろうか」。思いながら疲労困憊の身体は、電車の座席にヘタレこんでいた。

（取材　都築、山崎委員）